

愁いと賦

——曹植を中心に——

林 香 奈

はじめに

後漢後期に抒情的な小賦が現れると、都や宮殿を詠するような大型の賦よりも、三曹や建安七子らを中心としてさらに抒情性の高い賦が盛んに創作されるようになったことは周知の通りである。馬積高氏は抒情の範囲が拡大・深化していくのをこの時期の賦の一つの特徴として、具体的には、悲憤慷慨する「抒情言志」の賦が増加し、自然の景物、愛情、婚姻、従軍を詠じた抒情賦が現れるなど題材が多様化する点を指摘している^①。また程章燦氏は、後漢後期の抒情賦と建安賦にはほとんど差がないように見えるが、量的な増加と質的な飛躍があるとして、建安の抒情賦がとりあげる題材を自然・社会・人に分け、それぞれにいかなる作品と特徴が見られるかを詳細に検討している^②。

題材の多様化に伴って、賦の表現手法も必然的に多様化していき、詩と賦が問題を詠じるといふ作品も見られるようになること、また、馬積高氏が指摘するとおり、抒情化の傾向は賦に限らず詩や文についても見られることからすると、詩と賦の制作にはどのような関わりがあるのか、同じく情感溢れる内容を詠むということになれば、両者の

違いはどこにあるのかという疑問も生まれてこよう。

この問題に対しては、つとに鈴木修次氏が「建安詩の題材と賦」^④において検討を加えており、建安詩は「賦の世界に接近し、賦の題材をこなし、制作の風習や趣向などにおいて、賦との交流を示すようになり、「賦に接近することによって、確実に詩の領域をひろげたのであるが、しかし賦に近づき、その要素を摂取するにもなって、逆に賦の世界とはちがったところに、詩の世界を定置せしめる潜在意識的動きが、生まれてきた」として、「情感の描出をめざすかに思われ」ながらも、「いろいろの情景のとりあわせのもとに羅列的にくりひろげられたムードの描写であって、作者の自己の歎息が、むき出しに語られ」^⑤ることのない賦と、もっぱら情感を描出しようとする詩にその違いを見出している。一方、程章燦氏は建安の詩賦の表現には非常に似通ったところがあるが、詩よりも大胆激越に表現する賦もあり、詩と賦では同じ題材を扱っても異なる手法をとるとする。また詩の賦化は漢代の楽府以来見られるものだが、建安では賦の詩化が見られるとも言っている^⑥。

詩が賦化したのか、賦が詩化したのかという問題は、詩の側から見

るか、賦の側から見るかによっても変わってくるであろうし、両者が相互に深く影響しあったことに違いはないので、どちらとも言い難いが、いずれにせよ、詩と賦はやはり文体を異にする以上、いかに接近した内容や表現を持つようになったとしても、別の表現様式として認識されていたと思われる。だからこそ、同題を詩と賦で別に詠じる面白さがあつたのであろうし、さまざまな題材を試みるということも行われたのであろう。

曹丕を中心とした創作の場において、遊戯的に詩賦を制作した建安詩人たちの中で、最も多様な題材によって、かつ最も抒情的に賦を詠んだのが曹植であつた。その題材の豊富さは、共通の題材を集団で制作するという当時の文壇の傾向に添うことによつてもたらされたものではあるが、単にそうした既存の、あるいは与えられた題材のみではなく、一定の意図を持って選択された題材もあつたはずである。

そこで本論では、曹植が新たな題材を賦に取り込んだことがもつ意味を考えるとともに、その試みが抒情賦の展開の中で果たした意義にも少しく触れてみたい。

一、芸文類聚にみる愁い

多様な題材を詠ずる建安賦について、程章燦氏は独自の分類によりいくつかの特徴に言及しているが、その一つとして、後漢の蔡邕の賦と類似した題材・内容をもつ作品が特に多い点に触れ、後漢以来の題材を踏襲するものが少なくないことを指摘している^⑦。いま一つの特徴

として、詩人たちが集団的な創作活動を展開したことにより、多くの共通する題材をもつ作品が見られるようになったことについて、「登台賦」「鸚鵡賦」「迷迭賦」などの三十六題、十八人の詩人に共通する作品計百二十六篇を挙げ、特に王粲（二十五篇）・曹植（二十二篇）・曹丕（十九篇）に際だつて多く見られることに触れている^⑧。

さらにさきにも少しく触れたが、抒情的な賦については自然・社会・人に分け、それぞれを内容によつて細分化し、具体的にどのような題材の作品があるかを示している。たとえば自然は「時序・氣象・動物・植物・河海・珍奇器物」に分け、「時序」には「大暑賦」「感節賦」「秋思賦」「氣象」には「愁霖賦」「喜霽賦」といった具合に、それぞれ多様な題材の賦が制作されていること、しかもやはりこれらの題材が十四人の建安詩人に共通して見られることを指摘している。同様に、社会については「行役征戰類」「射獵遊覽類」に分け、十人の建安詩人に類似した作品があることを、また人については「人物」「情志」に二分別し、さらに「人物」を「神女」「婦孺」に、「情志」を「懷思」「艷情」「悲愁」「述志」に細分化して、十四人の詩人に類似した題をもつ作品があることを示している^⑨。

こうした程氏の分類からは、建安賦の題材における一定の傾向や特徴を確かに見て取ることができるが、同じ分類に属する作品間の微妙な差異や、ここには分類されていない作品が示すものなど、この分類からは見えてこない特徴もあるかもしれない。実際に程氏によつて導き出された特徴は、当然のことながら冒頭で触れた馬積高氏の指摘する建安賦の特徴と基本的に符合する結果となっている。そこで抒情賦

の題材やその特徴をさらに探るために、試みに『芸文類聚』の分類を手がかりとしてみたい。抒情賦の中でも程氏が分類するところの「人」に相当する賦は特に情感の描出に重点が置かれていることから、『芸文類聚』の人物の分類をまずは挙げてみよう。

頭・目・耳・口・舌・髪・鬢・髻・胆・美婦人・賢婦人・老・言語・謳謡・吟・嘯・笑・聖・賢・忠・孝・德・讓・智・性命・友悌・交友・絶交・公平・品藻・質文・鑒識・諷・諫・說・嘲戲・言志・行旅・遊覽・別・怨・贈答・閨情・寵幸・遊俠・報恩・報讐・盟・懷旧・哀傷・妬・淫・愁・泣・貧・奴・婢・傭保・隱逸

比較のために『文選』の分類を挙げると次のようになる。

賦・京都・郊祀・耕籍・畋獵・紀行・遊覽・宮殿・江海・物色・鳥獸・志・哀傷・論文・音樂・情・述德・勸勵

詩・獻詩・公讌・祖餞・詠史・百一・遊仙・招隱・遊覽・詠懷・哀傷・贈答・行旅・軍戎・郊廟・樂府・挽歌・雜歌・雜詩・雜擬

詩文集である『文選』と類書である『芸文類聚』の分類を単純に比較するには無理があるかもしれないが、両者を眺めると、「行旅」「遊覽」「贈答」「哀傷」など共通した項目も見える。これらは作品が作られた状況・対象などによって分類したもので、いずれにも作者の心情や感慨が述べられる抒情的要素が含まれることは言うまでもない。ここで注目したいのは、『芸文類聚』においてはそうした分類以外に、人間の感情そのものである「怨」「妬」「愁」「泣」、あるいはそれに準ずる「笑」「泣」といった項目が見えることである。類書である以上、人間のさまざま

な要素を多面的に取り上げる必要からこうした項目が設けられたのであろうが、人間の喜怒哀楽をそのままではなく、怨・妬・愁・笑・泣として立項するところに、唐初の間心のありようが見て取れよう。怨・妬・愁・笑・泣のうち、『芸文類聚』を構成する「事(故事)」と「文(作品)」の別でみれば、「泣」はそもそも「事」の記述で占められていて「文」はなく、「妬」「笑」は「文」の記述が非常に少ない。一方「怨」「愁」では「文」に多くの詩賦が収載されており、編纂当時、怨嗟や憂愁がとくに文学の主要なテーマとして認識されていたことが窺われる。

これらの項目にどのような賦が収載されているかを見てみると、たとえば「笑」には晋の孫楚「笑賦」「怨」には漢の董仲舒「士不遇賦」、司馬遷「悲士不遇賦」、司馬相如「陳皇后長門賦」、班婕妤「自悼賦」、魏の丁廙「蔡伯喈女賦」、梁の江淹「恨賦」「妬」には梁の張纘「妬婦賦」が収められており、各時代のさまざまな詩人の代表的な賦が一篇ずつ採用されている。一方「愁」を見ると、魏の陳王曹植「敘愁賦」「愁思賦」「九愁賦」、魏の繁欽「愁思賦」「弭愁賦」、梁の簡文帝「序愁賦」が収められており、曹植の賦が三篇も採録されていることがわかる。さらにつづけて賦以外の文体として魏の陳王曹植「釈愁文」も収められており、これも合わせれば一項に四篇の曹植作品が採られていることになる。

『芸文類聚』全巻の賦の採録状況を確認すると、中には賦を収載しない項目や巻もあつたり、項目ごとに採録総数の差があつたりはするものの、各項では一人一作品ずつ採録される例が大半である。もちろん一人で複数篇がまとめて採られている例もあるが、それは特にその

詩人がその部門に優れた作を残している場合ということになる。ただ、複数の賦が連続して採録されている場合でもその多くは二篇までがほとんどで、三篇以上採録されているのは、以下の例のみである。

卷二十 人部・孝 晋 陸機 祖德賦・述先賦・思親賦

卷三十 人部・別下 魏文帝 離居賦・感離賦・永思賦・出婦賦

魏陳王曹植 出婦賦・愍志賦・婦思賦

卷三十四 人部・哀傷 魏文帝 悼夭賦・寡婦賦・感物賦

魏王粲 傷夭賦・思友賦・寡婦賦

晋 陸機 歎逝賦・愍思賦・大暮賦

卷三十五 人部・愁 魏陳王曹植 敘愁賦・愁思賦・九愁賦

卷三十六 人部・隱逸上 宋 謝靈運 逸民賦・入道至人賦・辭祿賦

卷六十一 居處部・総載居處 後漢 張衡 西京賦・東京賦・南都賦

晋 左思 蜀都賦・呉都賦・魏都賦

これらを見ると、張衡や左思による都の賦は言うまでもないが、「別」や「哀傷」にみえる建安の賦は集团的創作の中で生まれた代表的作品群ということになり、呉の陸遜、陸抗の徳を称揚したり、呉の滅亡と晋の混乱によって亡くなった人々を思慕したりする陸機の作品群は、陸機という詩人を象徴する内容を含んでいると言える。「隱逸」に見える謝靈運もまた然りである。とすれば、「愁」に見える曹植の作品もまた曹植を象徴する賦と見なされていたということになる。これはあくまで唐初の見解ではあるものの、実際に曹植が独自の創作意図をもって「愁」を題材とする賦を作っていたとも考えられよう。

『芸文類聚』卷三十五には曹植の賦に続けて、同時代の詩人である

繁欽の「愁思賦」「弭愁賦」が収載されていることから、「愁」も当時の集团的創作活動における賦のテーマの一つであった可能性もあり、「愁」を積極的に題材とするのは曹植に限ったことではなかったかもしれない。また『芸文類聚』は分類の部門を表す文字を題に含む作品を採用する傾向が強いことから、題に「愁」字を含む賦という制限されたものの中から見れば、曹植が際だつように見えるだけなのかもしれない。実際のところ、「愁」を題に含む作は曹植と繁欽以外に同時代詩人にはなく、その後の作としても、『芸文類聚』卷三十五に挙げられている梁の簡文帝の「序愁賦」以外に、庾珩・曹丕・曹植・陸雲らの「愁霖賦」、晋の李充「懷愁賦」、北周の庾信「愁賦」、隋の釈真観「愁賦」くらいである。ただ、「愁霖賦」は雨の部に収められているように内容的には愁いを詠んでも題材は雨なのであり、かつ集团的創作活動において制作されたものであるので、各人が自発的に選んだ題材というよりも与えられた題材ということになる。^⑩とすれば、「愁」そのものを題材とすること自体、やはり珍しい例と言えるのではないか。

曹植の「愁思賦」は『太平御覧』卷二十五時序部十などにおいて、また繁欽の「愁思賦」は『初学記』卷三歳時部において「秋思賦」とされており、内容的にも「秋」の愁いを描いていて「愁」の賦ではなかった可能性もある。程氏も両作品を「秋」の賦として、先の分類においては人に属する「悲愁」ではなく自然に属する「時序」に分類している。^⑪そうした疑問は残るものの、字型と内容の類似から、後に「愁」が「秋」に改められた可能性もあり、「愁」を「秋」と断定できる同

題の作品も他に見られない以上、曹植が意識的に「愁」を題材として選択した可能性も否定できないであろう。

曹植には建安詩人の中で曹丕・王粲と並んで多くの賦が残っているだけでなく、「実に賦頌の宗、作者の師なり」（呉質「答東阿王書」『文選』卷四十二）として賦の本流と賞賛する辞も残されていることから、当時においては非常に優れた賦の制作者と評価されていたと言える。しかし『文心雕龍』では、「明詩」においては曹植に言及するものの、「詮賦」においては「及仲宣靡密、發端必適。偉長博通、時逢壯采（王粲の作風は緻密で、賦の発端から力強く、徐幹は博学で、時に壮麗な文辞に出逢う）」と、王粲と徐幹の賦に言及するにとどまっております。劉勰のような伝統的文学観を持つ人物からすれば、曹植の賦には賦の本流をいく作品として際だったものがないと映ったと思われる。だとすれば曹植は叙事よりも抒情により傾く賦を詠み、従来の賦に課せられた枠を逸脱する作品や試験的な作品を書いたと言えるのかもしれない。

「愁」そのものを賦の題材とするという曹植の選択は、抒情小賦が増加していくという大きな流れの中では一見すると当たり前のことのように思われるけれども、一つの新しい試みであったとも考えられよう。

二 曹植と愁い

賦と「愁」という題材との関わりをさらに考えるために、まずは曹

植の詩を中心に愁いの表現を確認しておこう。

『芸文類聚』卷三十五の「愁」には、後漢の張衡「四愁詩」、晋の張載「擬四愁詩」、宋の王徽「詠愁詩」、梁の王僧孺「夜愁示諸賓詩」、同「忽不任愁聊示固遠詩」、梁の劉孝綽「夜不得眠詩」、梁の劉孝先「和兄孝綽夜不得眠詩」という七篇の作品が収載されており、賦と同様、基本的には「愁」字を題に含むものを中心に採録していると思われる。曹植にも愁いの情を詠んだ詩は数多くあるが、「愁」そのものを題として詠んだ作がない以上、採録対象とはならなかったであろうし、また張衡の「四愁詩」は後人の偽託と見る説もあるが、偽託であるか否かにかかわらず、「愁」を題材として詠んだ詩といえはまずは張衡であったということでもあるのであろう。

では曹植は愁いを詩でどのように表現しているのであろうか。濃淡の差こそあれ曹植の詩歌にはほぼ全篇に憂愁の情が詠み込まれているので、一つの手がかりとして、「愁」字にしばって詩を見てみよう。「愁」字だけを追うことに有効性があるかどうかはわからぬが、『芸文類聚』も「愁」として立項し、かつ曹植が「愁」を賦の題として選択している意図を考える以上、曹植詩の「愁」字を検討することにも相応の意味はあろう。

「愁」字を用いている曹植の詩は、以下の三例である。

明月照高樓	明月	高樓を照らす
流光正徘徊	流光	正に徘徊す
上有愁思婦	上	に愁思の婦有り
悲歎有餘哀		悲歎して余哀有り

「七哀詩」(『文選』卷三十三)

慊慊仰天歎

慊慊として天を仰ぎて歎き

愁心將何憩

愁心 將に何にか憩えんとす

「浮萍篇」(『玉台新詠』卷二)

端坐苦愁思

端坐して愁思に苦しむ

攬衣起西遊

衣を攬りて起ちて西遊す

：

欲歸忘故道

帰らんと欲して故の道を忘れ

顧望但懷愁

顧望して但だ愁いを懷く

：

誰令君多念

誰か君をして多念ならしめ

自使懷百憂

自ら百憂を懷かしむ

「贈王粲」(『文選』卷二十四)

「七哀詩」と「浮萍篇」は男性を思う女性の愁いを述べたものであり、「贈王粲」は友人王粲を心配する曹植自身の心持ちを詠じたものである。この三例だけでは特徴を見出すことが難しいので、「憂」字を含む詩歌の用例を併せて見ると、曹植には「憂」字を含む例の方が多く、また一定の傾向が見て取れる。たとえば、「先民 誰か死せざらん、命を知らば復た何をか憂えん」(『箜篌引』)、「長く懐い永く慕い、憂心 醒の如し」(『應詔』)、「憂思して疾疢を成すは、乃ち兒女の仁なる無からんや」(『贈白馬王彪詩』)、「生時は榮樂を等しくし、既に没して憂患を同じくす」(『三良詩』)、「去り去りて復た道う莫かれ、沈憂は人をして老いしむ」(『雜誌』六首其二)、「閉居は吾が志に非ず、

心に甘んじて国憂に赴かん」(『雜詩』)のように、多くは曹植自身の置かれている境遇に対する憂愁を正面から直接的に訴える例が多い。もちろん「春思 安んぞ忘る可けん、憂戚 我と并せり」(『雜詩』)や「憂懷 中従り来る、歎息して雞鳴に通ず」(『棄婦詩』)のように女性の憂いを詠んだものも二例見られるが、作品の内容から見て曹植の用いる「憂」字には、用法に一定の傾向があることが認められる。とすれば、「愁」字も「憂」とは別の意を込めて使用していた可能性がある。

「愁」と「憂」は、いずれも本来は処世や境遇に対する憂愁をいう言葉と言える。たとえば『詩經』秦風・晨風には「未だ君子を見ず、憂心樂しむ靡し」とあり、賢人にあえぬ憂いを詠んでいる。また『左伝』襄公二十九年には呉の季札が「頌」を聴いて発した言葉に、「哀しみて愁えず、樂しみて荒まず」とある。杜預はこれに「命を知るなり」と注を附し、天命を知ることが愁えずにいられることと理解しており、恐らくそれが古くからの妥当な解釈を反映したものであっただろうことが窺われる。さらに「憂愁」という語になると、『史記』屈原賈生列伝に「故に憂愁幽思して離騷を作る」とあり、不遇を悲しむ屈原の心情を表すのに用いられたことばであることがわかる。

それが後漢後期以降になると、女性やその心情を描く作品が増加するに連れて、女性のうれいもこの二語で表現するようになっていく。いくつか例を挙げてみると、「憂いの来ること尋環の如し、席に匿ざれば捲くべからず」(後漢、秦嘉「贈婦詩」三首其一)、「憂愁して寐ぬる能わず、衣を攬りて起ちて徘徊す」(古詩十九首「其十九」)、「沈

陰 愁憂を結び、愁憂 誰が為にか興る。：時は再び得べからず、何
為ぞ自ら愁惱せん」(徐幹「室思詩」)、「何を以て愁悲を結ぶ、白絹の
双中衣。：君を望んで坐する能わず、悲苦 我が心を愁えしむ」(繁
欽「定情詩」)、「願わくは君に従いて終に没せん、愁は何ぞ久しく懷
くべけんや」(曹丕「寡婦詩」)、「賤妾瑩瑩として空房を守り、憂い來
りて君を思いて敢て忘れず」(曹丕「燕歌行」二首其一)¹³ というように、
「愁」「憂」があまりこだわりなく用いられていることが見て取れよう。

もちろん本来からある用法も併用されていて、たとえば「生年 百
に満たず、常に千歳の憂を懷く」(古詩十九首「其十五」)、「百慮する
も何をか為さん、至要は我に在り。愁いを天上に寄せ、憂いを地下に
埋めん」(仲長統「見志詩」二首其二)、「慨して当に以て懷すべし、
憂思忘れ難し。何を以て愁いを解かん、唯だ杜康有るのみ」(曹操「短
歌行」)、「君子 苦心多し、愁うる所は但だ一のみならず」(曹丕「善
哉行」)、「舟を方べて大江を溯れば、日暮 我が心を愁えしむ。：羈
旅に終極無く、憂思は壮にして任え難し」(王粲「七哀詩」三首其二)、
「愴愴として殷憂を懷き、殷憂して居るべからず」(呉質「思慕詩」)
といった例が挙げられる。

こうして比較してみると、曹植の「憂」字の用法には偏りがあるこ
とは明らかであろう。曹植が他の詩人とは異なり、「憂」字を自らの
心情を直接描出する際に意識的に用いている以上、恐らく「愁」につ
いても一定の意識を持って使い分けていたと想像される。

さらに言えば、先にあげた曹植の「七哀詩」と「贈王粲」に見える「愁
思」という語は、ありふれた表現に見えるけれども、実は詩にはそう

用例の多くない語である。「愁思」の語を含む詩は、曹植以前には秦
嘉の「贈婦詩」其二に「針葉は屢しば進むべし、愁思 数を為し難し」、
「古詩十九首」其十九に「戸を出でて独り傍徨し、愁思 当に誰にか
告ぐべき」、「為焦仲卿妻作」に「晝晝として日 暝れんと欲し、愁思
して門を出でて啼く」¹⁵ という女性の愁いという例が見られるだけで、
その後は鮑照や江淹、梁の簡文帝や庾肩吾といった南朝の詩人にまで
見ることができないのである。¹⁶

では、曹植は「愁思」を含めた「愁」の語をどのような意識で用い
たのか。「愁」という題材を賦に取りこむ問題を考えながら、曹植の「愁」
語に対する意識を次に併せて考えてみたい。

三 愁いと賦

(一) 愁思賦・叙愁賦

「愁思」という言葉そのものは、もともと宋玉の「高唐賦」に「長
吏 官を隳^すて、賢士 志を失い、愁思して已むこと無く、歎息して涙
を垂る」と見える。また後漢の王逸『楚辞章句』「天問章句」の序に
も「仰ぎて図画を見、因りて其の壁に書すに、何めて之を問わば、以
て憤懣を漂^もらし、愁思を舒瀉^{じょしゃ}す」とある。¹⁷ 前者は高唐の景観による人
の変化をいう箇所だが、「失志」の直後に「愁思」の語が見え、その
意味では王逸の序にいう屈原の境遇にも通じるところがあり、「愁思」
と「失志」は結びつきやすい言葉であったということが言える。
それが先に見てきたような女性の愁いを表す言葉に変化していく

きつかけは、司馬相如の「長門の賦」であるといつてよいであろう。「長門の賦」は周知のとおり、漢の武帝の寵愛を失った陳皇后が長門宮で過す様子を描いたものである。まずその序には「孝武皇帝の陳皇后、時に幸を得るも頗る妬なり。別れて長門宮に在り、愁悶悲思す」とあり、賦の本文には「日は黄昏にして望み絶え、悵として独り空堂に託す。明月を懸けて以て自ら照らし、清夜を洞房に徂る。雅琴を援きて以て調を変え、愁思の長くすべからざるを奏す」とある。司馬相如の名とともに寵愛を失った女性の「愁思」するさまは広く浸透していったものと思われる。

さきに挙げた秦嘉の「贈婦詩」、「古詩十九首」其十九、「為焦仲卿妻作」、さらに曹植の「七哀詩」がいずれも「愁思」の語によって女性の愁苦を詠んだのもそのためであらうし、曹植のあとに続く南朝詩人たちの用例もほとんどが女性の心情を詠んだものである。先に示した詩人以外の例でいえば、たとえば梁の費昶「長門后怨」の「愁思して且つ牀に帰り、羅襦 方に泣を掩う」は明らかに「長門賦」を踏まえた作であるし、ほかに梁の徐悱妻（劉令嫺）「和婕妤怨」の「日落ちて応門閉づ、愁思 百端生ず」、隋の薛道衡「豫章行」の「樓中に愁思して嚙みを開かず、始めて復た牕に臨みて早春を望む」なども例として挙げられよう。

さて、こうした用法の広がりを持つようになった「愁思」という語を曹植は賦に採り入れている。「愁」を題に含む賦として『藝文類聚』卷三十五愁に採られている二つの賦「愁思賦」と「叙愁賦」がそれである。まずは「叙愁賦」を見てみよう。

時家二女弟、故漢皇帝聘以為貴人。家母見二弟愁思、故令予作賦曰、嗟妾身之微薄、信未達乎義方。遭母氏之聖善、奉恩化之彌長。迄盛年而始立、脩女職於衣裳。承師保之明訓、誦六列之篇章。觀圖像之遺形、竊庶幾乎英皇。委微軀於帝室、充末列於椒房。荷印紱之令服、非陋才之所望。對牀帳而太息、慕二親以憎傷。揚羅袖而掩涕、起出戸而彷徨。顧堂宇之舊處、悲一別之異鄉。

序文に「時に家に二女弟あり、故の漢皇帝 聘して以て貴人と為す。家母 二弟の愁思するを見、故に予をして賦を作らしめて曰く」とあり、二人の妹が漢の献帝に嫁ぐことになり、二人が「愁思」する様子を母が目にして、曹植に賦を作らせたという経緯が記されている。本文では、妹の立場に立つて、母の優れた恩愛と教育を受けたこと、女工や「列女伝」を修めて舜に娶された娥皇や女英のようにになりたいと思うものの、高い身分などは望んではおらず、両親を思つては悲しみが増すばかりで、涙を流してさまよい歩き、住み慣れた場所を振り返つては、ひとたび別れば異郷にいるも同然だと悲しくなる、といった心情を綴っている。

一読して気づくのは、この賦の序文に「二弟愁思」とあり、確かに女性の愁いを詠じた賦ではあるものの、これまで見てきたような男性との別離や愛情に由来する女性の愁いではなく、肉親との別れの情を詠んだものであることだ。この点については程氏も、宮中に入る榮譽ではなく、故郷や親元を離れる恨みを詠んでおり、宮怨の題材の中でも独立した新しさがあり、あらたな境地を開いていると指摘しているが、²⁹そうした新しさを感じるのは、そこに「愁思」という言葉でイメー

ジされる内容とは全く別の本文が用意されているからでもあろう。

肉親との別れとその悲しみに対する心情の表出は、曹植文学の一つの重要なテーマでもあるが、「叙愁賦」は建安十八年（二一三年）秋の作と考えられ、後継争いが激化する直前の作であり、まださほど切実ではなかったであろうから、それ以上の深読みは不要だろう。ただ、女性（妹）の「愁」を詠むという課題を与えられた中で、「愁思」ということばを巧みに転換する手法からは、「愁」字を含めた措辞に対する曹植独特の感性が窺われよう。

その後、曹植の置かれる状況は一変し、まさしく憂愁の日々を送ることになる。そうした中で、前に述べたとおり、「憂」と「愁」をかなり意識的に使い分けて作品を綴っていくのである。そう考えたとき、「愁思賦」も相応の意図をもって命名されているのではないかと想像される。

「愁思賦」は明帝の太和年間（二二七―二三二）の作とみられている。^②「叙愁賦」を制作した時とは全く違う状況に置かれた曹植が、「愁思賦」で次のように詠んでいる。

四節更王兮愁氣悲、遙思倘怳兮若有遺。原野蕭條兮煙無依、雲高氣靜兮露凝衣。野草變色兮莖葉稀、鳴蜩抱木兮鴈南飛。歸室解裳兮步庭前、月光照懷兮星依天。居一世兮芳景遷、松喬難慕兮誰能仙。長短命也兮獨何愆。

季節は移り変わり愁いに満ちた気は悲しく、遙かに昔に思いを致しても心晴れず、なくしたものがあるかのようなのである。秋の原野は寂しく烟は寄る辺なく漂い、雲は高く気は澄んで、衣に露が降りる。

野草は色を変え茎や葉は落ち、蜩が木を抱きかかえるようにして鳴き、雁は南に飛んで行く。部屋に帰り衣裳を解いて庭先を歩く。月光は懷を照らし、星は天に列なる。すでに三十年を生きてきたが、よい季節はあつという間に過ぎ去って、赤松子や王子喬などの仙人を慕うことも難しいのに、誰が仙人になどなれようか。人の寿命は決まっているのだ。

内容を見れば秋の愁いを詠んだもので、『太平御覽』卷二十五、『初学記』卷三、『北堂書鈔』卷一五四でいずれも「愁思賦」とするものも無理のないことである。ただ、「一世に居りて芳景遷り」以降の句の内容は『芸文類聚』にしか見られず、その諦めにも近い歎きには単に秋の憂鬱な気分だけではない、隠された強い主張が透けて見える。趙幼文氏もこの賦は全篇ではないと指摘するように、さらに強い憂愁の情が後半に展開されていた可能性もないではない。曹丕亡きあとの太和年間になったとはいえ、依然として親族間の交流も思うように認められない不自由な日々の中で、曹植はそれまでになく繰り返し上表文を書いて自らの主張を伝えようとしている。その努力は私的に制作した詩賦においても怠らなかつたであろうし、この賦もその役割を果たしたかもしれない。その場合、「秋思」の賦では直接的すぎたのではないか。むしろ「愁思」の賦という題にすることによって、表面的には女性の愁いを装う可能性を残しながら、実質的には最も主張したい「失志」に起因する愁いの情を述べるものへと転換する、その仕掛けが「愁思」という言葉であつたとは言えないか。

「愁思」の語にそうした二面性を持たせることが可能であつたこと

は、同じく『芸文類聚』卷三十五に収載されている繁欽の「愁思賦」と「弭愁賦」の存在が示している。繁欽の「愁思賦」は曹植の賦と同様、秋の愁いを詠じたもので『初学記』卷三においては「秋思賦」とされている。集団創作における共通のテーマであった可能性もないではないが、曹植の賦が内容的にみて太和年間之作と推定される一方で、繁欽は建安二十三（二一八）年には没しているため、個別に作られた賦とみて間違いないであろう。

繁欽の「愁思賦」は、秋の夜に眠れずに雨音を聴いていると、「心は沈切にして以て憂を増」^②してきて、「王事の鹽^とまる靡^なきを嗟^{なげ}き、士は時に感じて情悲し。願わくは身を出して以て役に徇^{したが}い、簡書に式^{のつと}りて以て帰るを忘れんことを。時に陟^{ちよ}岵^こして以て旋顧^{くわん}し、涕^{なみだ}は纓^{ひた}を漸^{ひた}して啼^かくこと鮮^{すくな}し。鳴鶴の哀音を聴き、我が行いの違うこと多きを知る」^③と、曹操のために尽力せんことを述べており、この「愁思」は本来の用法にもとづくものと言えよう。一方「弭愁賦」は「愁^やいを弭^やむ」、つまり憂さ晴らしの賦で、「愁思」の語こそ含んでいないが、その内容が人を「愁」えさせるほどの優れた美女のさまを描くものであり、「愁」は繁欽自身の愁いと女性をめぐる愁いとを重ねた意味を含んでいる。

「愁思」を含めた「愁」の語はさまざまに創作や解釈の幅を持たせる語であったといえるかもしれないし、曹植はそれを効果的に利用したとは言えないだろうか。

（二）九愁賦・釈愁文

『芸文類聚』卷三十五愁に収載されている曹植の作品には、ほかに「九愁賦」と「釈愁文」とがある。「釈愁文」は『芸文類聚』では「賦」ではなく「文」として挙げられているものの、この作品を賦に近似したものを見なすものも少なくない。たとえば馬積高氏は曹植の現存する賦は六十一篇として、誥咎文、釈愁文、七啓、七咨、九詠、遙逝、騶謁説をその中に含めており、本論でも考察の対象としたい。

「九愁賦」でまず想起されるのが楚辞の「九歌」「九章」、宋玉の「九弁」、さらに漢代にそれを継承した王褒の「九懷」、劉向の「九歎」、王逸の「九思」、蔡邕「九惟文」などの作品であろう。「九愁賦」もこれらの作品同様、屈原に代わってその心情を述べるものである。さらに曹植には「九詠」という作品もあり、やはり屈原について述べている。両者の内容が近似していることはすでに多くの指摘があり、馬積高氏は「九愁賦」と「九詠」との内容が一致しており、類似した六句があることを理由に、実際は一篇の作であると推定している。^④一方、鈴木氏は「曹植には「九詠」というのがあり、九章構成をとっていたのかどうかは明らかでないが、しかしともかくたくさんの断片を残している。ただし同じ「九」を以てなづけられても、たとえば曹植の「九愁賦」（『芸文類聚』卷三五）は、いわば「窮愁賦」で、九章構成に従うべき「九」とは別のものである^⑤」として別作品と見ている。趙幼文氏も、現存する「九詠」の冒頭句「芙蓉車兮桂衡」が『北堂書鈔』卷一四一に「擬楚辞」として引用されていることを根拠に、「九詠」は「九歌」を模擬して作られたものとする。一方の「九愁賦」は曹植

自身の境遇を述べた作品として、別の時期に制作されものと見ている。²⁷⁾ いずれの説が正しいかはひとまず措くとして、「九愁賦」も「九詠」も「九」 という題をもつ以上、「九歌」や「九章」を大前提として踏まえているのは当然のことであろう。ここでむしろ気になるのは、同じような作でありながら、「九愁賦」には「九詠」に添えられない「賦」の字が添えられていることである。その理由について明確なことは何も言えないが、曹植自身による命名とすれば、「賦」をつけることによつて、楚辞を踏まえつつも楚辞とは違うものということを示そうとする意図があつたのではないかと推測する。「九詠」については、制作時期を未詳とする趙幼文氏と「九愁賦」と同じく黄初四（二二三）年と見る徐公持氏、太和年間の作とする曹海東氏など、一定しない。一方の「九愁賦」は徐氏、趙氏ともに黄初年間の作と見解は一致するが、曹氏は建安十八（二一三）年に作られた「叙愁賦」とともに、「愁思賦」「九愁賦」を続けて配置しており、一連の創作と見なしているようである。²⁸⁾

ここで「九愁賦」の冒頭の一節を見てみると、

嗟離思之難忘、心慘毒而含哀。踐南畿之末境、越引領之徘徊。捲浮雲以太息、顧攀登而無階。匪徇榮而愉樂、信舊都之可懷。恨時王之謬聽、受奸枉之虛辭。揚天威以臨下、忽放臣而不疑。登高陵而反顧、心懷愁而荒悴。念先寵之既隆、哀後施之不遂。雖危亡之不豫、亮無遠君之心。刈桂蘭而秣馬、含余車於西林。願接翼於歸鴻、嗟高飛而莫攀。因流景而寄言、響一絕而不還。傷時俗之趨險、獨悵望而長愁。忘れがたい別れの思いに胸を痛め、心には激しい怨みの気持ちと

哀しみがある。南方の辺境の土地を踏み、遙か遠くまで首を伸ばして眺めやるものの、徘徊するばかりで進むこともできぬ。浮雲を眺めてため息をつき、浮雲に登りたいと思うが登るすべもない。榮誉や愉樂を求めるというのではない、かつての都を懐かしく思うのである。王（曹丕）が讒言を耳にして、邪な輩（王機や灌均）の嘘偽りの言葉を受け入れてしまったことを恨めしく思う。王はその威光でもって天下に君臨し、忽ち私（曹植）を疑うこともなく放逐してしまった。高い陵に登って振り返り見て、心に愁いを懷きつつ憔悴している。先王（曹操）より与えられた盛んな恩寵を思い、王（曹丕）より恩沢の施されないことを哀しむ。危亡は予期できぬものであるとはいうものの、君主（曹丕）を遠ざけようとする心がある訳ではない。桂や蘭を刈って馬に秣い、自らの馬車を西の林に停める。北へ帰る鴻と一緒に飛んで行きたいと願うものの、高く飛んでそれに取り付くことができないことを歎く。流れ飛ぶ雁の影に言寄せようとするが、鴻の声は一たび鳴けば消えさつて戻ってこない。世の趨勢がいよいよ危うい方向へと流れていくことに心を痛め、ひとり哀しみ愁いている。

屈原になぞらえつつも、そのまま曹植自身のことと読める内容になっている。傍線部の「先寵の既に隆なるを念い、後施の遂げざるを哀しむ。危亡の豫らずと雖も、亮に君を遠ざくるの心無し」は、およそ建安期のことばとは思えない。その他の傍線を付した箇所に見える願望が遂げられないと歎く句は、女性の口吻を借りて自らの辛い心情を吐露する曹植の詩にしばしば見られるものである。こうしたことから考える

と、あくまで推測の域を出ないが、「九愁賦」は曹丕在位中の黄初年間の作とみてよいであろう。

「九愁賦」が黄初年間の作とすれば、曹丕に配慮した物言いをする必要があり、この切実な内容を持てばこそ、屈原を下敷きにしつつも、それを直接的に楚辞で表現するのではなく、「賦」という遊戯的な文体によって示すことで要らぬ禍を回避できたのではないか。九章構成を採らないのもそうした意図によるものであろう。しかもこの賦の中では「愁い」を主題とし、現状への不満を訴えながらも、一度も「憂」の字は使用していない。たとえば後漢王逸の「九思」には、どの篇にも「憂愁」「憂心」「憂国」と「憂」の字がちりばめられ、語彙からも屈原が想起されるように表現されているが、曹植のこの賦ではそれを避けているかのようなのである。もちろん曹植も賦に「憂」字を用いる例はあるが、それはたとえば、「節遊賦」の「解憂」、「感節賦」の「娛賓賦」の「忘憂」、「閑居賦」の「銷憂」などいずれも「憂さ晴らし」の意味である。また賦以外の文に「憂」字を用いるのは、ほとんどが「表」か「誄」といった公文書である。「九愁賦」は楚辞をふまえた作でありながら、その要素を極力排除し、もっぱら「愁」という語と女性の歎きを訴えるような表現を用いることによって、婉曲的に、しかし実際に実に直接的、効果的に曹植の悲愁を伝えることに成功していると言えるのではないか。

なお、鈴木氏は先に触れたように、「九愁賦」は「窮愁賦」であるとしているが、「九愁」はむしろさまざまな愁いの意であろう。先に引用した本文波線部でも「心は愁いを懷いて荒悴す」、「独り悵望して

長く愁う」と二度も「愁」の字を用いているが、後半においても、

魏晉以營私、害予身之奉公。共朋黨而妬賢、俾予濟乎長江。嗟大化之移易、悲性命之攸遭。愁慊慊而繼懷、惟慘慘而情挽。

愚昧な者どもは競って私利私欲にはしり、私の出仕は思うようにならぬ。徒党を組んで賢人を妬み、私を長江の向こうに追いやった。国(曹丕)からの政令の変化に驚き、我が身の境遇を悲しむ。愁は悶々として心中よりわき起こり、愁いに心が左右される。

愁戚戚其無爲、遊綠林而逍遙。臨白水以悲嘯、猿驚聽以失條。亮無怨而弃逐、乃余行之所招。

愁いに心ふさがりなす事もなく、緑の林をさすらう。川に臨んで悲しげにうたい、猿はその声に驚いて枝から落ちるほど。過ちなくして遠く放逐されたのは、私の行いが招いたもの。

と繰り返し「愁」字を挙げ、執拗に襲ってくる愁いと、そのつどに変化する心情を巧みに描き分けている。

梁の簡文帝「喜疾瘳詩」(『芸文類聚』卷七十五)や梁の元帝「登隄望水詩」(『初学記』卷六)などの詩に、さまざまな愁いの意で「九愁」の語が用いられるようになるが、それは曹植の賦に由来するものである。とすれば、曹植の「九愁賦」は梁代には盛んに読まれていたのであるうし、やがて『芸文類聚』に「愁」が立項されて、「九愁賦」が収録される理由もそのあたりから窺われよう。

次に「釈愁文」は、賦に近い内容をもつが、賦とは異なる文体であり、李兆洛選輯『駢体文鈔』(中州古籍出版社、一九九〇年)では「雜文」

に分類されている。徐師曾『文体明弁序説』（人民文学出版社、一九八二年）では「釈」という条を設けており、ここでは「釈は解である」として、先行する作品に蔡邕の「釈誨」、郗正の「釈議」、皇甫謐の「釈勸」、束皙の「玄居釈」などを挙げている。⁹⁹これらは先の『駢体文鈔』では、宋玉の「対楚王問」、東方朔の「答客難」、揚雄の「解嘲」などに続くものとして、「設辞」、つまり『文選』の分類による「設論」に分類されている。

基本的には問答形式による議論を通じて、一つのテーマを究明していく内容であって、遊戯的な文体とも言えるであろう。冒頭を少しく引用すると、

予以愁慘、行吟路邊、形容枯悴、憂心如焚。有玄虛先生見而問之曰、子將何疾以至於斯。答曰、吾所病者、愁也。先生曰、愁是何物、而能病子乎。答曰、愁之爲物、惟惚惟恍、不召自來、推之弗往、尋之不知其際、握之不盈一掌。寂寂長夜、或羣或黨、去來無方、亂我精爽。其來也難進、其去也易追、臨食困於哽咽、煩冤毒於酸嘶。加之以粉飾不澤、飲之以兼肴不肥、溫之以火石不消、摩之以神膏不稀、受之以巧笑不悅、樂之以絲竹增悲。醫和絕思而無措、先生豈能爲我著龜乎。

私は愁いの気持ちに心を痛め、歩きながら吟じ、その姿は憔悴し、憂いの心は焼かれるかのようにであった。玄虚先生という人物に会うと、先生は私に尋ねて言った。「あなたは何の病気があってこのような状態になられたのですか。」私は答えていった。「私の病気は愁いです。」先生が言うには、「愁いとは何でしょう。あなたを病気にすることができるのですか」と。私は答えて言った。「愁いというも

のは、ただ心がぼんやりとしている状態のときに、招かずとも勝手にやってくるもので、これを推してもどこにも往かず、探してもどこにあるのかが判らず、掴もうとしても手のひらに満ちることはない。寂しく長い夜、愁いは群れになり、徒党を組んでやってきて、それどこから来てどこに行くのかも判らないまま、私の精神をかき乱す。愁いがやってくると前に進むことも難しくなるのに、去るときにはそのあとを追うのは容易く、食事を前にしても喉を通らぬほど苦しみ、怨みや悩みのために声も出なくなる。化粧をしてもつやもなく、いろいろな肴で酒を飲んでもふくよかになりもせず、火のついた石で温めても愁いは消えることはなく、神膏をこすりつけてもなくならず、笑いによって受け止めても楽しくはならず、管弦の楽で楽しんでも悲しみを増すだけである。春秋時代の名医である医和が可能なかぎり考えを巡らしても手の施しようがないものです。先生、私のために教え導いていただけませんか」と。

このあと先生の教えが続いて記されるが、その概要は、愁いにとりつかれるのは名誉と利益に拘泥しているからであり、先生に「無為の薬」を処方されることによって愁いが消えるというもので、曹植の道家思想に対する関心を示す作として取り上げられることも多い。

福井佳夫氏は、明の張溥が『漢魏六朝百三家集』の「楊侍郎集題詞」において「逐貧の賦は解嘲より長ず、釈愁、送窮、文士の調脱は、多く此に原づく（逐貧賦長於解嘲、釋愁送窮、文士調脱、多原於此）」と記す一文を挙げ、道家思想への憧れにもとづく作というよりは、貧乏神を追い払おうとして議論するというユーモア溢れる揚雄の「逐貧

「賦」に連なる遊戯的な作品であることを指摘している。³⁰確かに曹植の「釈愁文」にもそうした要素を見て取ることができる。ただ、ここではこの一文が遊戯的か否かということよりも、その文体のテーマとして「愁」を選択したことの意味をまずは考えたい。

福井氏は「逐貧賦」と「釈愁文」を比較すると、いずれも「つかまえてどころのない抽象物（「貧」と「愁」）を描写したものであると指摘している。³¹また追い払ってもつきまといつづける愁いの描写は、「逐貧賦」にすでに見られる描写だとも述べている。確かに福井氏の指摘するとおり、抽象的な題材を取り上げるのは揚雄の手法を採り入れているのであろうが、それだけでなく、当時、見えないものを捉えようとする、あるいは可視化するという試みが、曹植の作品の中では積極的に行われていることも関わりがあろうし、曹植以外の詩人にもそうした関心があったと思われる。

たとえば、漢代の楽府古辞である「古歌」（『全漢詩』卷十）には「秋風蕭蕭として人を愁殺す。出でては亦た愁え、入りては亦た愁う。座中何れの人 誰か憂いを懐かざる（秋風蕭蕭愁殺人。出亦愁、入亦愁。座中何人誰不懷憂）」といった表現があり、見えない風の動きによって、見えない愁いが生まれるさまを詠んでいる。また曹丕の「善哉行」（『文選』卷二十七）には「憂い來たるに方無し、人の之を知る莫し（憂來無方、人莫之知）」愁いはどこからやってくるかわからないという、「釈愁文」に通ずる内容を詠っている。曹丕の詩をもちろん曹植は読んでであろうし、創作において、その措辞を踏まえるということもあったであろう。³²曹丕の詩の存在は曹植自らの関心とも相俟って、「釈」と

いう文体で解明する対象を「愁」とすることに何らかの影響を与えたかもしれない。

また、福井氏は「釈愁文」の創作意図については問題にしていけないが、単に遊戯的な文体として曹植がこの作品を書いたとも思われない。「釈愁文」の制作年代が徐氏、趙氏が指摘するのとおり太和年間であるとすれば、これまでには詠んだことのない文体で自己のつらい心情をより印象強く表そうとする意図が曹植にはあったかもしれない。そう考えられるのは、さきに引用した「釈愁文」の冒頭を見れば、「予は愁いを以て惨み、行きて路辺に吟じ、形容枯悴し、憂心は焚かるが如し」と、「九愁賦」では用いなかった「憂」字を使っているからである。これは太和年間に入り、境遇はさして変わらぬものの、曹丕時代よりは上表文を繰り返し奉ることができる余裕ができたようになった中で、あらためて自らの「愁い」のものは「失志」にあるのであると宣言するかのようなものかもしれない。そうしたときに、自らの心情をすべてさらけ出すには、やはり「釈」という遊戯的な文体に結局は頼らざるを得なかったであろう。

おわりに

「愁」という題材を賦に取りこむことは、曹植にとつてはより効果的に、かつ安全に物を言う一つの仕掛けだったのではないか。またその仕掛けのおかげで、曹植の賦は優れて抒情的な作となり得たのかもしれない。曹植の文学は主張が明快で一貫していることから、非常に

純粹で真っ直ぐな詩文を書いているように見えるが、実際は言葉の端々にまで注意深く神経をとがらせて書いていたと思われる。それが結果として曹植自身の作品の質を高めていくことになるのだが、その試みは時代を経て後世にも影響を与えていったであろう。

「愁い」の賦そのものは、本論の初めに記したように、その後も多くは生まれない。ただ、人間の情感にまつわる事柄を賦の題材にするとか、抽象的な概念を賦によって具象化するといった例は、曹植以降いくつも見る事ができる。

清の陳元龍『歷代賦彙』は、賦をテーマごとに分類し歴代の代表的な作品を並べているが、外集卷十七「情感」所収の作品を挙げると、

笑賦（晋孫楚） 歡賦有序（明屠隆）

恨賦（梁江淹） 擬恨賦（唐李白） 擬恨賦有序（明李東陽）

泣賦（梁江淹） 別淚賦（明張明弼） 離憂賦（宋梅堯臣）

九愁賦（魏曹植） 叙愁賦有序（魏曹植） 序愁賦（梁簡文帝）

愁賦（唐符載） 愁賦（明王世貞） 坐愁賦有序（宋晁補之）

四愁賦（明黃淮）

江上愁心賦贈趙侍郎（唐張說） 謝燕公江上愁心賦（唐趙冬曦）

江上愁心賦（宋李綱）

とあり、「情感」として括られる一連の賦の中でその最も古い作品が曹植の「愁」の賦であることが、改めて確認できよう。直接的には関連はなくとも、たとえば「文」という抽象的な概念を詳細に分析にしようとする陸機の「文賦」の発想や、同じく陸機の「別賦」、江淹の「恨賦」、梁の簡文帝的「悔賦」など、この陳元龍の分類には挙がらない

作品にも、曹植が開いた新たな賦の詠み方への試みが遠く響いていると思われるのである。

（注）

- ① 馬積高『歷代辭賦研究史料概述』、中華書局、二〇〇一年、七十六・七十七頁。および同氏『賦史』、上海古籍出版社、一九八七年、一四四～一四七頁。
- ② 程章燦『魏晉南北朝賦史』、江蘇古籍出版社、一九九二年、四十頁、および第二章第三節「斑斕的情感世界」。
- ③ 前掲注①『賦史』一四六頁。
- ④ 東京教育大学文学部紀要『国文学漢文学論叢』第七輯、一九六二年、一〇一頁。
- ⑤ 前掲注④、九十頁。
- ⑥ 前掲注②七十九～八十三頁。
- ⑦ 注②前掲書四十二～四十四頁。たとえば蔡邕「霖雨賦」に対して応瑒・王粲・曹丕・曹植の「愁霖賦」、蔡邕「述行賦」に対しては応瑒「撰征賦」、曹丕「述征賦」、曹植「述行賦」「述征賦」などの十一作品、蔡邕「青衣賦」に対しては応瑒・王粲・楊修・丁廙の「神女賦」、曹植の「洛神賦」といったように、蔡邕の賦と類似した題をもつ三曹および建安七子の作品八題を挙げ、蔡邕の影響に触れている。
- ⑧ 注②前掲書四十六～四十七頁および附表。
- ⑨ 注②前掲書五十九～七十三頁。
- ⑩ 鈴木氏は曹丕・曹植・応瑒の「愁霖賦」を「霖雨の感傷を展開させるもので、その意味ではまた、感傷をたのしむ賦である」としている。
- ⑪ 注④前掲論文七十九頁。
- ⑫ 注②前掲書六十二～六十四頁。
- ⑬ 宋・王観国『学林』卷七「四愁詩序」。遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』、中華書局、一九八三年、一八〇頁。
原文は以下の通り。「憂來如尋環、匪席不可捲。」（後漢、秦嘉「贈婦詩」

三首其一。「玉台新詠」卷一、「憂愁不能寐、攬衣起徘徊」(「古詩十九首」其十九「文選」卷二十九。「玉台新詠」卷一)、「沈陰結愁憂、愁憂爲誰興。時不可再得、何爲自愁惱」(徐幹「室思詩」)「玉台新詠」卷一)、「何以結愁悲、白絹雙中衣。望君不能坐、悲苦愁我心」(繁欽「定情詩」)「玉台新詠」卷一)、「願從君兮終沒、愁何可分久懷」(曹丕「寡婦詩」)「芸文類聚」卷三十四)、「賤妾榮榮守空房、憂來思君不敢忘」(曹丕「燕歌行」二首其一「文選」卷二十七、「玉台新詠」卷九)

原文は以下の通り。「生年不滿百、常懷千歲憂」(「古詩十九首」其十五「文選」卷二十九)「百慮何爲、至要在我。寄愁天上、埋憂地下」(仲長統「見志詩」二首其二「後漢書」仲長統伝)、「慨當以慷、憂思難忘。以何解愁、唯有杜康」(曹操「短歌行」)「文選」卷二十七、「君子多苦心、所愁不但一」(曹丕「善哉行」)「宋書」樂志三)、「方舟溯大江、日暮愁我心。羈旅無終極、憂思壯難任」(王粲「七哀詩」三首其二「文選」卷二十三)、「愴愴懷殷憂、殷憂不可居」(吳質「思慕詩」)「三國志」王粲伝附吳質伝)

原文は以下の通り。秦嘉「贈婦詩」三首其二「針藥可屢進、愁思難爲數」(「玉台新詠」卷一)、「古詩十九首」其十九「憂愁不能寐、攬衣起徘徊。出戶獨徬徨、愁思當告誰」(「文選」卷二十九。「玉台新詠」卷一)、「爲焦仲卿妻作」(「晚曉日欲暝、愁思出門啼」)「(「玉台新詠」卷一)

たとえば、宋の鮑照「擬行路難」十八首(「鮑明遠集」卷八)其九に「君金釵瑋瑋簪、不忍見之益愁思」、同其十七に「日月流邁不相饒、令我愁思怨恨多」とある。また梁の江淹「石上菖蒲詩」(「芸文類聚」卷八十一)に「不見空閨裏、縱橫愁思端」、梁の簡文帝「寒閨詩」(「玉台新詠」卷十)に「譬喻持相比、那堪不愁思」、梁の庾肩吾「和徐主簿望月」(「芸文類聚」卷一)に「樓上徘徊月、窗中愁思人」といった例がある。なお、曹丕の「雜詩」二首其一に「鬱鬱として悲思多く、綿綿として故郷を思う」という句があるが、「文選」では「悲思」に作り、「芸文類聚」卷二十七行旅では「愁思」に作る。

原文は以下の通り。宋玉「高唐賦」(「文選」卷十九)に「長吏隳官、賢士失志、愁思無已、歎息垂淚。」後漢王逸「楚辭章句」「天問章句」

序に「仰見圖畫、因書其壁、何而問之、以漂憤懣、舒瀉愁思。」なお、「芸文類聚」卷三十五は「何」を「呵」に作る。

原文は以下の通り。「孝武皇帝陳皇后、時得幸頗妬。別在長門宮、愁悶悲思。日黃昏而望絕兮、悵獨託於空堂。懸明月以自照兮、徂清夜於洞房。援雅琴以變調兮、奏愁思之不可長」(「文選」卷十六哀傷)

原文は以下の通り。費昶「長門后怨」(「玉台新詠」卷六)「愁思且歸牀、羅襦方掩泣、劉令嫺「徐排妻雜詩(和婕妤怨)」(「玉台新詠」卷八)「日落應門閉、愁思百端生」、薛道衡「豫章行」(「樂府詩集」卷三十四)「樓中愁思不開囀、始復臨牕望早春。」

注②前掲書七十三頁。
趙幼文「曹植集校注」(人民文学出版社、一九八四年)および徐公持「曹植年譜考証」(社会科学文献出版社、二〇一六年)による。

注②趙幼文前掲書四七三頁。
原文は以下の通り。「何晏秋之慘慘、處閑夜而懷愁。潛白日於玄陰、翳朗月於重幽。零雨濛其迅集、潢淹汨以橫流。聽峻階之回響、心沉切以增憂。嗟王事之靡盬、士感時而情悲。願出身以徇役、式簡書以忘歸。時陟岵以旋顧、涕漸纓而鮮唏。聽鳴鶴之哀音、知我行之多違。悵俯仰而自憐、志荒咽而摧威。聊弦歌以厲志、勉奉職於閨闈。」

注①前掲書一五三頁。また「九詠」の「先后 悔ゆるも其れ及ぶ靡く、冀わくは后王の一たび悟らんことを」以下の後半部分は「九愁賦」の脱文であり、後人が誤って「九詠」に補入したとする説もある。曹海東注訳・蕭麗華校閲「新詠曹子建集」、三民書局、二〇〇三年、四四三(四四四頁に紹介される楊柳橋氏の説。原文未見。

注④前掲論文、九十四頁補注。

注②参照。

注②・⑤を参照。
原文は以下の通り。「按字書云、釋、解也。文既有解、又復有釋、則釋者、解之別名也。蓋自蔡邕作釋詁、而卻正釋義、皇甫謐釋勸、束哲玄居釋、相繼有作、然其詞旨不過通相祖述而已。」

③⑩ 福井佳夫『六朝の遊戯文学』（汲古書院、二〇〇七年。第三章 揚雄「逐貧賦」論。）

③⑪ 注③⑩前掲書九十三頁。

③⑫ 拙論「光」と「風」をめぐって―曹植を中心に」（『未名』第十四号、一九九六年。）

③⑬ 曹植が曹丕の詩句を踏まえた表現を意識的に用いていることについては、拙論「曹植の「罪」とことば」（『未名』第三十四号、二〇一六年）を参照されたい。

（二〇一七年十月二日受理）
（はやし かな 文学部日本・中国文学科准教授）